

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720004

研究課題名(和文) 功利主義と直観主義の論争に対するカント倫理学の影響とその現代的意義の考察

研究課題名(英文) Kant's Influence on the controversy between utilitarianism and intuitionism and its contemporary significance

研究代表者

児玉 聡 (Kodama, Satoshi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80372366

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、功利主義と義務論(直観主義)の対立にカントの倫理学はいかなる影響を与えたのかを検討した。初年度はベンタム以降の功利主義者が、カントの思想をどう理解したかの文献研究を行った。

次年度は、前年度に文献調査したうちいくつかの重要文献の検討を通じて、カントがベンタム以降の英国思想の流れにおいてどのような影響を与えたのかについて検討した。

最終年度は、海外の研究者と功利主義に関する意見交換を行うとともに、国際学会で研究報告を行ったほか、国内研究会で近年の脳神経科学や進化論研究が規範倫理に持つ影響について報告した。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the influence Kant had on the controversy between utilitarianism and deontology (intuitionism). The research included literature review concerning how utilitarians (from Jeremy Bentham to R.M. Hare) understood Kant's ethics. Focusing on important journal articles and monographs, the researcher then examined the different ways Kant influenced utilitarians in formulating their own versions of utilitarianism. The researcher exchanged opinions with other researchers in this field, both domestic and international. Finally the researcher published several papers as well as giving presentations at several conferences.

研究分野：倫理学

キーワード：功利主義 カント 倫理学 思想史 直観主義 義務論

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、功利主義を思想史的に研究するとともに、その現代的意義について、特に生命倫理を中心に検討してきた。これまでの研究で、「功利主義 vs 直観主義」の対比から「功利主義 vs 義務論」の転換が起きた時期は20世紀中盤になって生じたことが明らかになったが、この「功利主義 vs 直観主義」論争に対してカントの倫理思想が与えた影響については未解明の部分が大きかった。現代にいたるまでの功利主義の思想史的展開を明らかにするには、英国の功利主義と直観主義の論争にカントの思想がどのような影響を与えているか、どのような経緯で「義務論」の代表的理論家がカントになったのかを明らかにせねばならない。こうした、カント倫理学と功利主義の影響関係を扱った体系的研究は国内外においてまだ十分ではないので、体系的研究をする必要がある。本研究はこうした問題意識に端を発するものである。

2. 研究の目的

本研究は、西洋倫理思想における功利主義の位置づけおよびその現代的意義を明らかにするという研究構想の一部として、これまでの研究で明らかとなった功利主義と直観主義の対立に関して、カント倫理学がいかなる影響を及ぼしているかという新たな視座からの解明を試みるものである。「義務論 (deontology)」という言葉は、C.D.ブロードらが「直観主義」の代わりに使うべき言葉として1930年代に作った言葉であることがわかっている。しかし、義務論という立場の代表的理論家がカントになった経緯については十分に明らかになっていない。今日、功利主義の主要な論争相手がプリチャードやロスなどの直観主義者ではなく、カントである理由は何なのか。また直観主義者だけでなく、ベントム以降の功利主義者たちが、カントが提唱した定言命法をそれぞれどのようにして自身の立場に取り入れていったのか。これらの検討を通じて、現代倫理学における「功利主義 vs 義務論」という対立軸が持つ意義と問題点を明らかにすることを目的としている。

そしてまた、この対比は哲学・倫理学分野だけでなく、人々の倫理的行動を解明しようとする脳科学や心理学などの分野でも見られる。しかし、そうした実証研究では、しばしばカントの倫理学と直観主義が混同されていることも多く、研究そのものの意義が問われかねない論述も散見される。本研究では、直観主義と功利主義の論争に与えたカント倫理学の影響を詳しく見ることを通じて、功利主義陣営と反功利主義陣営の論争の全体

像を多面的に描き出すことも目的とするものである。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、(1)英国の功利主義と直観主義の論争に、カントの思想がどのような影響を与えているかの解明のため、カントのテキストと、主要な功利主義者と直観主義者のテキストおよび二次文献を精読した。(2)どのような経緯で「義務論」の代表的理論家がカントになったのかを明らかにするために、20世紀中盤以降の英米の倫理学の主要な学術誌および研究書を詳細にサーベイした。また文献研究だけでなく、国内のカント研究の専門家との意見交換を通じて理解を深めた。(3)脳科学や心理学において功利主義対義務論の対立がどう理解されているかを明らかにするために、文献調査を行った。これについても国内外の研究者が集う場でのディスカッションを通じて、理解を深めるという方法を取った。

4. 研究成果

本研究では、功利主義と義務論(直観主義)の対立にカントの倫理学はいかなる影響を与えたのか検討した。

初年度はベントム以降の功利主義者(ミル、シジウィック、ハロッド、ヘアなど)が、カントの思想をどう理解したかの文献研究を行った。具体的にはこのテーマに関する国内外の先行研究や思想史の文献(Hare 1986,1997; Schneewind 1977, 蔵田 1995等)を網羅的に収集し、対立の図式化と論点整理を行った。なお、入門書という体裁になるが、本研究の成果にもとづき、『功利主義入門 はじめての倫理学』を公刊した。また、ロールズにおける義務論的発想の由来を検討した結果、フランケナの影響の重要性が示唆された。これに関して、「功利主義批判としての『善に対する正の優先』の検討」を公刊した。

さらに、関連する国内・国際学会に参加し、公衆衛生や大規模災害における倫理について、義務論的・功利主義的見地からの報告を行った。その報告に基づき、論文として、「功利主義と公衆衛生」、「Tsunami-tendenko and morality in disasters」を公刊した。

次年度は、前年度に文献調査したうちいくつかの重要な文献、具体的には、Kant and His Influence(2005)所収の The Early Reception of Kant's Thought in England (Giuseppe Micheli) や The Cambridge Companion to Utilitarianism (2014) 所収の Kantian Ethics and Utilitarianism (Jens

Timmermann)などの文献の検討を通じて、カントがベントム以降の英国思想の流れにおいてどのような影響を与えたのかについて検討した。

さらに、英国オックスフォード大学のウエヒロ応用倫理研究所を訪れ、功利主義と幸福の関係について研究会で報告を行なった。また、功利主義や義務論といった規範倫理学理論の観点から、英国の終末期医療の現状について意見交換を行った。これについて、児玉聡・田中美穂「英国における終末期医療の議論と課題」を公刊した。

最終年度は、英国オックスフォード大学の Roger Crisp や豪州モナシュ大学の Robert Sparrow などの海外の研究者と功利主義に関する意見交換を行うとともに、横浜国立大学で行われた、功利主義学会などの国際学会で研究報告を行ったほか、国内研究会で、近年の脳神経科学や進化論研究が規範倫理に持つ影響、具体的には苦痛や苦しみが規範倫理に関して持つ含意について報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

児玉聡、「功利主義と公衆衛生」、法哲学年報 2011、査読あり、2011 年号、2012、7-22

児玉聡、「功利主義批判としての『善に対する正の優先』の検討」、社会科学研究、査読なし、64 巻、2013、49-72

児玉聡、伊吹友秀、「親には最善の子どもを産む義務があるか PGD をめぐると論争の批判的考察」、生命倫理、査読あり、23 巻、2013、4-13

児玉聡、田中美穂、「英国における終末期医療の議論と課題」、理想、査読なし、692 巻、2014、52-65

田中美穂、児玉聡、藤田みさお、赤林朗、「イングランドの小児緩和ケアに関する法政策・統計データ・資金体制・提供される医療の現状」、日本公衆衛生雑誌、査読あり、60 巻、2013、462-470

児玉聡、「書評：The Cambridge Companion to Utilitarianism(Cambridge University Press,2014)」、イギリス哲学研究、査読なし、38 巻、2015、79-80

Satoshi Kodama、"Tsunami-tendenko and morality in disasters", Journal of Medical Ethics、査読あり、41 巻 5 号、2015、361-363

[学会発表](計 9件)

Satoshi Kodama、"Tsunami-tendenko and morality in disasters"、Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012、2012 年 5 月 17 日、国際文化会館(東京都港区)

Satoshi Kodama、A Utilitarian Approach to Public Health Ethics, The 11th World Congress of Bioethics 2012 年 6 月 28 日、Rotterdam (Netherlands)

児玉聡、「費用対効果分析と救命原則」、日本生命倫理学会、2012 年 10 月 29 日、立命館大学(京都府京都市)

Satoshi Kodama、"Should One Suffer At All?"、Uehiro Carnegie Oxford Conference 2013、Oxford (UK)

児玉聡、英国における終末期医療の議論と問題点、日本生命倫理学会、2013 年 11 月 30 日、東京大学(東京都文京区)

Satoshi Kodama、"Should We Suffer At All?"、National Taiwan University and Kyoto University Symposium、2012 年 12 月 19 日、National Taiwan University (Taiwan)

Satoshi Kodama、"Should We Suffer At All?"、International Society for Utilitarian Studies 2014、2014 年 8 月 12 日、横浜国立大学(神奈川県横浜市)

Satoshi Kodama、"Should We Suffer At All?"、Sweden-Kyoto University Symposium、2014 年 9 月 12 日、Uppsala University (Sweden)

児玉聡、「(功利主義者が)徳倫理を真面目に考える」、日本倫理学会 徳倫理ワークショップ 2：翻訳と展望、2014 年 10 月 3 日、一橋大学(東京都国立市)

〔図書〕(計 2 件)

児玉聡、ちくま新書、『功利主義入門 はじめての倫理学』、2012、224

大瀧雅之、宇野重規、加藤晋、児玉聡ほか、東京大学出版会、『社会科学における善と正義 ロールズ『正義論』を超えて』、2015年、370

6. 研究組織

(1)研究代表者

児玉聡 (KODAMA, Satoshi)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：80372366

(2)研究分担者

該当なし()

研究者番号：

(3)連携研究者

該当なし()

研究者番号：